

【S.2.1】

定数  $a, b$  を  $0 < a < b$  とする.

定数  $t > a$  に対して,  $xy$  平面上の曲線

$$y = -(x+b)(x+a)(x-a)(x-t) \quad \dots\dots(1.1)$$

と  $x$  軸の囲む 3 つの領域の内の左側の部分の面積を  $L(t)$ , 右側の部分の面積を  $R(t)$  で表す.

(1)  $t = b$  のとき,  $L(t) = R(t)$  であることを示せ. (2)  $L(t) = R(t)$  となる  $t (> a)$  を求めよ.

【解答】

(1) (1.1) の関数を  $f(x)$  と表す.

$t = b$  のとき,

$$f(x) = -(x+b)(x+a)(x-a)(x-b) \quad \dots\dots(1.2)$$

であり,

$$\begin{aligned} f(-x) &= -(-x+b)(-x+a)(-x-a)(-x-b) \\ &= -(x+b)(x+a)(x-a)(x-b) = f(x) \quad \dots\dots(1.3) \end{aligned}$$

が成り立つので,  $f(x)$  は偶関数であり,

そのグラフは  $y$  軸に関して対称である (Fig.1).

従って, (1.2) と  $x$  軸の囲む 2 つの領域は合同な図形となり,

その面積は等しい.

$$\therefore L(t) = R(t) \quad \dots\dots(1.4)$$

(2) (1.2) と  $x$  軸の囲む領域の左側の部分 (Fig.2) の面積  $L(t)$  は, 曲線  $y = f(-x)$  と  $x$  軸の囲む領域の右側の部分 (Fig.3) の面積と等しい. ( $\because y = f(x), y = f(-x)$  の  $y$  軸対称性による)

そこで, Fig.3 における  $L(t)$  と Fig.2 における  $R(t)$  の大小関係を調べる.

$0 < a < x$  の範囲において,

$$\begin{aligned} f(x) - f(-x) &= -(x+b)(x+a)(x-a)(x-t) + (x+t)(x+a)(x-a)(x-b) \\ &= 2(t-b)(x+a)(x-a)x \begin{cases} > 0 & (t > b) \quad \dots\dots(1.5) \\ < 0 & (t < b) \quad \dots\dots(1.6) \end{cases} \end{aligned}$$

であることに注意して,

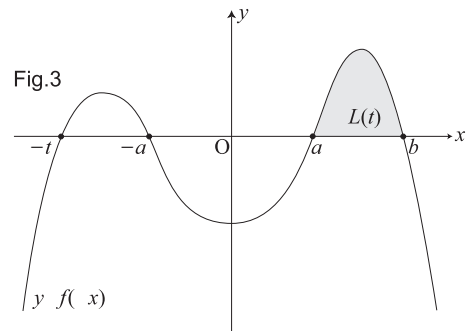
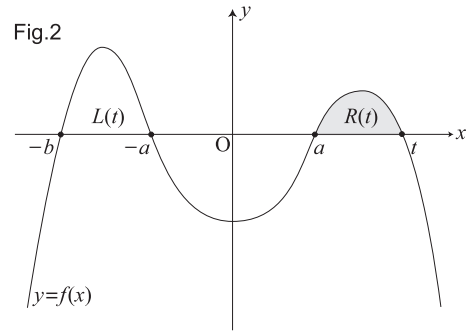
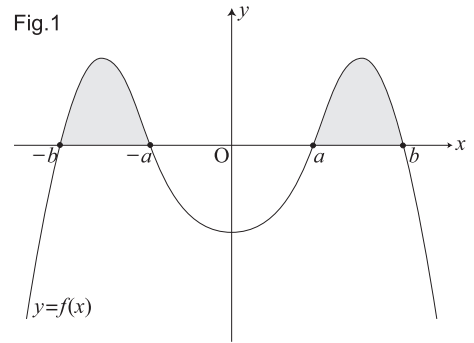
●  $t > b$  の場合;

$$R(t) - L(t) = \int_a^t f(x) \, dx - \int_a^b f(-x) \, dx > \int_a^b (f(x) - f(-x)) \, dx > 0 \quad (\because (1.5)) \quad \therefore R(t) > L(t) \quad \dots\dots(1.7)$$

●  $t < b$  の場合;

$$R(t) - L(t) = \int_a^t f(x) \, dx - \int_a^b f(-x) \, dx < \int_a^t (f(x) - f(-x)) \, dx < 0 \quad (\because (1.6)) \quad \therefore R(t) < L(t) \quad \dots\dots(1.8)$$

以上の議論により,  $L(t) = R(t)$  ( $t > a$ ) を満たすのは  $t = b$  の場合に限られる.



【別解】 - 微分積分の基本定理 -

$$(x+b)(x+a)(x-a) \stackrel{\text{put}}{=} u(x) \wedge R(t) - L(t) \stackrel{\text{put}}{=} h(t)$$

$$\begin{aligned} h(t) &= - \int_a^t u(x)(x-t) \, dx + \int_{-b}^{-a} u(x)(x-t) \, dx \\ &= - \int_a^t xu(x) \, dx + t \int_a^t u(x) \, dx \\ &\quad + \int_{-b}^{-a} xu(x) \, dx - t \int_{-b}^{-a} u(x) \, dx \end{aligned}$$

より,

$$\begin{cases} h'(t) = \int_a^t u(x) \, dx - \int_{-b}^{-a} u(x) \, dx \\ h''(t) = u(t) > 0 \quad (t > a) \quad (\because \text{Fig.1}) \end{cases} \dots\dots (1.11)$$

また, Fig.1 により,

$$h'(a) = - \int_{-b}^{-a} u(x) \, dx < 0 \quad \dots\dots (1.12)$$

Fig.2 により,

$$\begin{aligned} h'(b) &= \int_a^b u(x) \, dx - \int_{-b}^{-a} u(x) \, dx \\ &= \int_a^b u(x) \, dx - \int_b^a u(-y)(-dy) \\ &= \int_a^b u(x) \, dx - \int_a^b u(-x) \, dx \\ &= 2 \times \int_a^b x(x+a)(x-a) \, dx > 0 \quad \dots\dots (1.13) \end{aligned}$$

(1.11), (1.12), (1.13) により,  $h'(t)$  のグラフは Fig.3.

更に, Fig.4 により,

$$\begin{aligned} h(a) &= \int_{-b}^{-a} u(x)(x-a) \, dx \\ &= \int_{-b}^{-a} (x+b)(x+a)(x-a)^2 \, dx < 0 \quad \dots\dots (1.14) \end{aligned}$$

また, (1) の結論より,

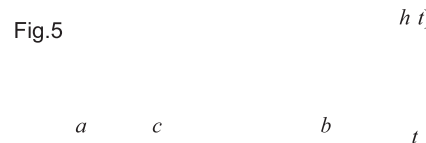
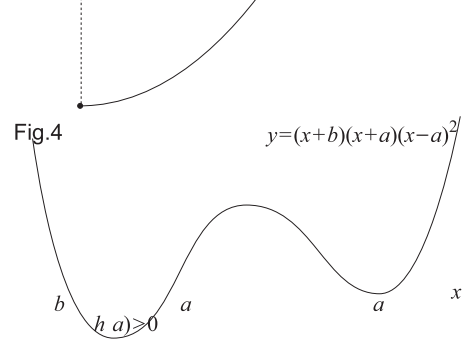
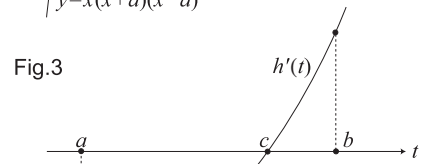
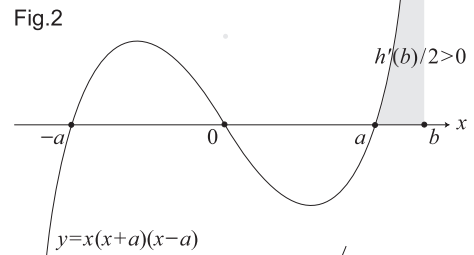
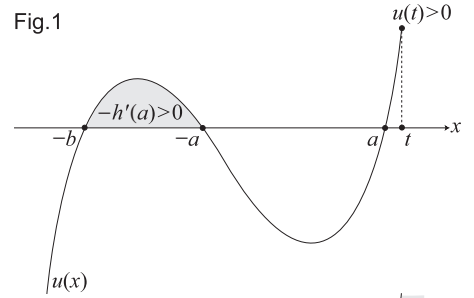
$$h(b) = R(b) - L(b) = 0 \quad \dots\dots (1.15)$$

Fig.3 のグラフおよび (1.14), (1.15) より,

$h(t)$  のグラフは Fig.5 の通りなので,

$$h(t) = 0 \iff R(t) = L(t)$$

の解は  $t = b$  に限られる.



【S.2.2】

数列  $\{a_n\}$  は  $a_n \geq 0 (\forall n)$  を満たし,

$$s_n = \sum_{k=1}^n a_k \quad \dots\dots(2.1)$$

と定義するとき,

$$\prod_{k=1}^n (1+a_k) \leq 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} (s_n)^k \quad \dots\dots(2.2)$$

が成り立つことを示せ.

【解答】

$n = 1$  のとき, 明らかに不等式 (2.2) の等号が成立する.

$n = 2$  のとき, 不等式 (2.2) は,

$$\begin{aligned} (1+a_1)(1+a_2) &\leq 1+a_1+a_2+\frac{1}{2}(a_1+a_2)^2 \\ \iff 1+a_1+a_2+a_1a_2 &\leq 1+a_1+a_2+a_1a_2+\frac{1}{2}(a_1^2+a_2^2) \\ \iff 0 &\leq \frac{1}{2}(a_1^2+a_2^2) \quad \dots\dots(2.3) \end{aligned}$$

であるから常に成立. 等号条件は,  $a_1 = a_2 = 0$

ある正整数  $n$  に対して不等式 (2.2) の成立を仮定するとき,

$$\begin{aligned} 1 + \sum_{k=1}^{n+1} \frac{1}{k!} (s_n + a_{n+1})^k &= 1 + \sum_{k=1}^{n+1} \frac{1}{k!} (s_n^k + k s_n^{k-1} a_{n+1} + \dots\dots) \quad (\because \text{二項定理}) \\ &\geq 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} s_n^k + \sum_{k=1}^{n+1} \frac{1}{(k-1)!} s_n^{k-1} a_{n+1} \quad (\because \text{上式 4 項目以降削除}) \\ &= 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} s_n^k + a_{n+1} \sum_{r=0}^n \frac{1}{r!} s_n^r \quad (\because k-1 \stackrel{\text{put}}{=} r) \\ &= 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} s_n^k + a_{n+1} \left( 1 + \sum_{r=1}^n \frac{1}{r!} s_n^r \right) \\ &\geq \prod_{k=1}^n (1+a_k) + a_{n+1} \prod_{r=1}^n (1+a_r) \quad (\because (2.3)) \\ &= \prod_{k=1}^{n+1} (1+a_k) \times (1+a_{n+1}) \end{aligned}$$

即ち,

$$\prod_{k=1}^{n+1} (1+a_k) \leq 1 + \sum_{k=1}^{n+1} \frac{1}{k!} s_{n+1}^k \quad \dots\dots(2.4)$$

従って, 数学的帰納法により, すべての正整数  $n$  に対して不等式 (2.3) が成立する.

【Note】不等式 (2.3) の等号成立条件は,

$$a_1 = a_2 = \dots = a_n = 0 \quad \dots\dots(2.5)$$

であることを確認せよ.

【S.2.3】

T大学のH校舎には4つの学生食堂がある。仲の良いA君とB君は毎日正午、前日とは異なる食堂で昼食をとることにしており、食堂で顔を合わせたときは必ず一緒に食事をする。ただし、2人は無作為に前日とは異なる食堂を選ぶ。2人がH校舎に通い始めた初日の4月1日の月曜日、食堂で顔を合わせることはなかった。更に、土曜、日曜には講義がなく、従って、この2日間は2人は大学に行かない。このとき、次の各確率を求めよ。

- (1) 1週間後の4月8日の月曜日、2人が食堂で顔を合わせ一緒に食事をする確率を求めよ。
- (2) 2人が2回目に食堂で顔を合わせる確率が最も高いのは何月何日か。

【解答】

ある特定の日に2人が顔を合わせる場合と合わせない場合のそれぞれについて、その翌日に顔を合わせる確率と合わせない確率は次の表の通りである。

	翌日に会う	翌日に会わない
当日に会った場合	1/3	2/3
当日に会わない場合	2/9	7/9

- (1) 4月1日を第1日目として、第n日目に2人が顔を合わせる確率を  $p_n$  で表すとき、

$$p_{n+1} = \frac{1}{3}p_n + \frac{2}{9}(1-p_n) \iff p_{n+1} = \frac{1}{9}p_n + \frac{2}{9} \iff p_{n+1} - \frac{1}{4} = \frac{1}{9}\left(p_n - \frac{1}{4}\right)$$

ここで、 $p_1 = 0$  であるから、

$$p_n = \frac{1}{4}\left(1 - \frac{1}{9^{n-1}}\right)$$

即ち、第6日目の4月8日の月曜日に顔を合わせる確率は、

$$p_6 = \frac{14762}{59049}$$

- (2) 顔を合わせる日を  $\square$  , 合わせない日を  $\square$  で表す。

1日目	2日目	3日目	.....	n-2日目	n-1日目	n日目	確率
			.....				$\left(\frac{7}{9}\right)^{n-4} \times \left(\frac{2}{9}\right)^2 \times \frac{2}{3}$
			.....				$\left(\frac{7}{9}\right)^{n-4} \times \left(\frac{2}{9}\right)^2 \times \frac{2}{3}$
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
			.....				$\left(\frac{7}{9}\right)^{n-4} \times \left(\frac{2}{9}\right)^2 \times \frac{2}{3}$
			.....				$\left(\frac{7}{9}\right)^{n-3} \times \frac{2}{9} \times \frac{1}{3}$

表より、第n日目に2回目の出会いをする確率  $q_n$  は、

$$q_n = \left(\frac{7}{9}\right)^{n-3} \times \frac{2}{9} \times \frac{1}{3} + (n-3)\left(\frac{7}{9}\right)^{n-4} \times \left(\frac{2}{9}\right)^2 \times \frac{2}{3} = \frac{8n-10}{3^5} \left(\frac{7}{9}\right)^{n-4} \quad (n \geq 4)$$

ただし,  $q_1 = q_2 = 0$ ,  $q_3 = \frac{2}{27}$  である.

このとき,

$$\frac{q_{n+1}}{q_n} > 1 \quad (n \geq 4) \iff \frac{7(8n-2)}{9(8n-10)} > 1 \quad (n \geq 4)$$

$$\iff 72n - 90 < 56n - 14 \quad \wedge \quad n \geq 4 \iff 4 \leq n < \frac{19}{4} \iff n = 4$$

従って,

$$q_3 = \frac{2}{27} = \frac{18}{243} < \frac{22}{243} = q_4 < q_5 \quad \wedge \quad q_5 > q_6 > q_7 > \dots$$

より,  $q_5$  が最大となるので, 2 回目に出会う確率が最も高いのは 4 月 5 日の金曜日である.

【S.2.4】

四角形 ABCD を底面とする四角錐 OABCD は、

$$\vec{OA} + \vec{OC} = \vec{OB} + \vec{OD} \quad \dots\dots(4.1)$$

を満たしており、

0 でない 4 個の実数  $p, q, r, s$  に対して、4 点 P, Q, R, S を

$$\vec{OP} = p\vec{OA}, \vec{OQ} = q\vec{OB}, \vec{OR} = r\vec{OC}, \vec{OS} = s\vec{OD} \quad \dots\dots(4.2)$$

によって定めるとき、P, Q, R, S が同一平面上にあれば、

$$\frac{1}{p} + \frac{1}{r} = \frac{1}{q} + \frac{1}{s} \quad \dots\dots(4.3)$$

が成り立つことを示せ.

【解説】

(4.3) より、 $p, q, r, s \neq 0$  であるから、(4.2) により、

$$\vec{OP} \neq \vec{0}, \vec{OQ} \neq \vec{0}, \vec{OR} \neq \vec{0}, \vec{OS} \neq \vec{0} \quad \dots\dots(4.4)$$

題意より、 $\vec{OA}, \vec{OB}, \vec{OC}$  は 1 次独立であるから、  
 $\vec{OP}, \vec{OQ}, \vec{OR}$  も 1 次独立であり、共面条件により、

$$\vec{OS} = \alpha\vec{OP} + \beta\vec{OQ} + \gamma\vec{OR} \quad \wedge \quad \alpha + \beta + \gamma = 1 \quad \dots\dots(4.5)$$

と表される. ( $\because$  P, Q, R, S は同一平面上)

このとき、(4.2) を (4.5) に代入して、

$$s\vec{OD} = p\alpha\vec{OA} + q\beta\vec{OB} + r\gamma\vec{OC} \quad \dots\dots(4.6)$$

(4.1) を (4.6) に代入して、

$$s\vec{OA} - s\vec{OB} + s\vec{OC} = p\alpha\vec{OA} + q\beta\vec{OB} + r\gamma\vec{OC} \quad \dots\dots(4.7)$$

ここで、 $\vec{OA}, \vec{OB}, \vec{OC}$  は 1 次独立であるから、

$$s = p\alpha \quad \wedge \quad -s = q\beta \quad \wedge \quad s = r\gamma \quad \iff \quad \alpha = \frac{s}{p} \quad \wedge \quad \beta = -\frac{s}{q} \quad \wedge \quad \gamma = \frac{s}{r} \quad \dots\dots(4.8)$$

(4.8) を  $\alpha + \beta + \gamma = 1$  に代入して、

$$\frac{s}{p} - \frac{s}{q} + \frac{s}{r} = 1 \quad \iff \quad \frac{1}{p} + \frac{1}{r} = \frac{1}{q} + \frac{1}{s} \quad \dots\dots(4.3)$$

を得る.

